vol.27　No.3、108-113ページ。

岩月純一.　1995.「『ベトナム語意識』の形成と『漢字/漢文』――『南風雑誌』に見る――」『東南アジア――歴史と文化』、243-24ページ。

岡田建志.　1999.「バオダイ（保大）帝」「ファム・クイン」　石井米雄監修『ベトナムの事典』東京：同朋舎、264ページ、277ページ。

川本邦衛.　2001.「ベトナム語のlexicography――古辞書の体裁、字喃その他――」『東南アジア史学会関東例会報告要旨集』、10-12ページ。

清水政明.　1997.「字喃（チューノム）」『しにか』vol.8/No.8、32-33ページ。

高島俊男.　2001.『漢字と日本人』東京：文春新書

チャールズ・フェン.　1974.『ホーチ・ミン伝　上』（陸井三郎訳）東京：岩波新書

広木克行.　1975.「ベトナムにおける母国語の解放と教育」小沢有作編『民族解放の教育学』東京：亜紀書房、306-330ページ。

ファム・カク・ホエ.　1995.『ベトナムのラスト・エンペラー』（白石昌也訳）東京：平凡社

古田元夫.　1991.『ベトナム人共産主義者の民族政策史――革命の中のエスニシティ――』東京：大月書店

古田元夫.　1996.『現代アジアの肖像10　ホーチ・ミン　民族解放とドイモイ』東京：岩波書店

B　欧文

Marr, David. 1981. *Vietnamese Tradition on Trial, 1918-1938.* Los Angeles: University of California Press.

Nguyễn Q. Thắng. 1993. *Khoa Cử và Giáo Dục Việt Nam.* TP.Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản Văn hoá-Thông tin.

Nguyễn Thành 1984. *Báo Chí Cách Mạng Việt Nam 1925-945.* Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.

Nguyễn Thị Tỳ. 1990. Tâm Sự *Kỷ Niệm Thơ* CLB Thơ Trang Liệt tr. 5.

Vietnam, The National Assembly. 1995. *The Constitutions of Vietnam 1946-1959-1980-1992* Hanoi: The Gioi Publishers.

参考文献

1．『ホーチミン全集』『ホーチミン選集』史料

『ホーチミン全集』は、初版の第１巻が1980年から始まり第10巻は1989年に刊行されている。*Hồ Chí Minh Toàn Tập*. Tập 1 (1980) đến tập 10 (1989). Hà Nội: Nhà xuất bản Sự Thật. 第２版は1994年から刊行が開始され、2000年までに全12巻が刊行された。*Hồ Chí Minh Toàn Tập*. Tập 1 (1994) đến tập 12 (2000). Hà Nội: Nhà xuất bản Chính Trị Quốc gia. 『ホーチミン選集』は全３巻が1980年に出版されている。*Hồ Chí Minh Tuyển Tập*. 1980. Hà Nội: Nhà xuất bản Sự Thật. 冒頭のTo は全集、Tu は選集を表し、次の数字は、収録巻ナンバーを指す。『ホーチミン全集』の引用ページは、第２版による。全集、選集ともに史料は全てベトナム語で記述されているが、原文がフランス語や英語、中国語など別の言語の場合もある。本論考で引用したホーチミンの著作の原文は、ベトナム語とフランス語で書かれており、それぞれＶをクオックグー版、Ｐをフランス語版として区別した。

To 1 1924 "Chính sách ngu dân," *Đông Dương* P tr. 398-402.

1924 "Báo chí," *Đông Dương* P tr. 403-407.

To 2 1925 *Bản Án Chế Độ Thực Dân Pháp (Le Proces de la Colonisation Francaice)*. P tr. 21-133.

1926-1-17 "Báo chí bình dân," *Thanh Niên* số 28, P tr. 446-447.

To 3 1945-9-2 *Tuyển Ngôn Độc Lập*, V tr. 555-567.

To 5 1948-9-2 "Thư gửi nam nữ chiến sĩ bình dân học vụ," *Những Lời Kệu Gọi của Hồ Chủ Tịch* V tr. 489-490.

Tr 1 1945-9 "Thư gửi cho học sinh," *Những Lời Kệu Gọi của Hồ Chủ Tịch* V tr. 358-360.

1945-10-4 "Chống nạn thất học," *Cứu Quốc* số 58, V tr. 367-368.

1945-10-17 "Gửi các ủy ban nhân dân các bộ, tỉnh, huyện và làng," *Cứu Quốc* số 69 V tr. 369-372.

2．その他

A　和文

アンダーソン、B．1987.『想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行――』（白石隆・白石さや訳）　東京：リブロポート

イ・ヨンスク．1997.『「国語」という思想――近代日本の言語認識』　東京：岩波書店

岩井美佐紀．1998.「ベトナム語のすすめ３――民族の解放、女性の解放」『言語』３号

よる作品が登場する。国家レベルでは一貫して漢文で記されていたのに対し、文学や地方レベルの行政文書はチュノムで記されることも多かった［清水　1997：32-33］。

（7）この点で、同じ漢字文化を受容し、漢字から自らのかな文字を考案した日本と比較してみると極めて興味深い。言語体系として、中国語と接点を持たなかった日本語とベトナム語は、伝統的にいったん漢字を受容したものの、ベトナム語の場合、キリスト教の布教およびヨーロッパの植民地化にともない、インドネシア語やフィリピン（タガログ）語などと同様、音韻をローマ字化する正書法が完成していったのである。もし日本が漢字と同時にローマ字と出会っていたら、迷わずローマ字によって表記される日本語ができていたであろうと指摘する論者もいる［高島　2001：28］。

（8）原著は、1924年にクオックグーで書かれているが、その後、幾つかの論考と合わせて1925年に Le Procès de la Colonisation Française と題してパリでフランス語で出版された。その後、1946年にそのままフランス語の著作がベトナムで出版された。ベトナム語初版（翻訳）が出版されたのは1960年である［史料 To 2 ：21-133］。

（9）チャンリエット村は、バックニン省トゥソン県ドンクアン社の自然集落である。人口は約3,000人、約700世帯で、農業と廃品回収などの商売との兼業農家が多数を占める商業村である。筆者は、1994年から約１年間村でフィールドワーク調査を行い、その後も毎年継続調査を行っている。同村は、独立以前からベトミン幹部を匿うなど、革命運動に積極的に関わっていた。

（10）レーニンの『革命への道』は、ホーチミンがベトナム語に訳出して1927年に発表された［史料 To 2 ：257-318］。

（11）『青年』紙上に掲載されたホーチミンの論説は、記事によってベトナム語とフランス語で書かれていたようである。ホーチミンの全ての著作を収めた『ホーチミン全集』には、ベトナム語のオリジナルが見つからなかったために、フランス語版から再訳出したものもあると注釈されている。残念なことに、ホーチミンが編集責任者をした『青年』88号までの彼の著作は『ホーチミン全集』に収められていないので、その全貌を知ることはできない。

（12）ベトナム独立同盟会（以下ベトミン）は、1930年に結成されたインドシナ共産党の大衆組織として結成された。『ベトナム独立』は、活動の根拠地を中国国境の山岳地帯に移したインドシナ共産党が、カオバン省、バッカン省党支部の機関誌として発行した新聞であった。民族統一戦線であるベトミンの結成をもって、表面上インドシナ共産党の公的な活動は「自主解散」した。

てるが、この意識は、固定的で単純ではなく、可変的で重層的である。民族意識を喚起するのは言語であり、多くの場合、少数民族の「母語」(mother tangue) は地方語であり、「国語」は学校教育を通じて獲得される第二言語になる。

(2) アンダーソンによれば、インドネシアの領域的広がりは植民地時代以前に成立したいかなる王国の領域とも一致せず、地理的分散、宗教的多様性、そして民族言語的多様性を包含している。ジャワ人、スマトラ人、アンボン人が自らを「インドネシア人」と認識するようになった背景には、高等教育機関がある植民地国家の首都バタヴィアへの「巡礼圏」が国家官僚機構のヒエラルキーによって成立していたことが大きい[アンダーソン　1987：203-207]。

(3) ベトナム語のローマ字化に最も早く取り組んだのは、17世紀にベトナムで布教活動をしたイエズス会の宣教師たちであった。ベトナム人信徒を得るために、宣教師たちは現地語を習い、ローマ字に表記していった。このようにして出来上がったベトナム語・ルシターナ語（ポルトガルの雅名）辞典の成果を踏まえ、多くの宣教師たちによって修正が加えられ、今日のクオックグーの正書法に至っている[川本　2001：11-12]。

(4)『学政総規』が公布される前にベトナム全域に設立されていた中等学校は、サイゴンの Chasseloup-Laubat（1874年開校)、ハノイの Collège du Protectorat à Hanoi（1908年開校)、フエの国学学校（trường Quốc Học 1896年開校)、ミートの Le Myre de Vilers (1879年開校)、サイゴンの紫衣学校（trường Áo Tím 女子校、1913年開校）の5校であった[Nguyễn Q. Thắng　1993：293]。

(5) ベトナム語の起源は、歴史的に古く、ベトナム語の原型は紀元前4世紀までには存在していたといわれている。言語学的には、アウストロアジア語族のモン・クメール語グループに属しているが、マレー語などアウストロネシア語族の影響や、シナ・チベット語グループ、タイ・カダイ語グループの影響なども指摘されている。1000年にも及ぶ中国の植民地支配の影響により、漢字を受容したが、ベトナム人は独自の発音方法で漢字を読んでいたとされる。11世紀に中国から独立した最初の統一王朝李朝以降、歴代王朝は、公文書を漢文で作成した。ベトナムにおける漢字の音読みは、同様に漢字を受容した日本と比較してみると、かなり類似している。例えば、「独立」という音は、日本では、doku-ritsu、ベトナムでは、độc lậpであり、互いに類推することが可能である。

(6) チュノムは、疑似漢字の一種で、漢字の構成要素を独自に組み替え、その読音を利用してベトナム語を表記したものといわれる。13世紀ごろからまとまったチュノムに

衆のことばとして捉え、近代概念を「固有語」でいかに表現するかということに心を砕いた。結果として、クオックグーは識字運動の中で「国語」として自立できるほどまで発展した。それは、クオックグーを使用する「国民」＝「我々」とは誰を指すのかという、主体の問題とも深く関連していたのである。

もちろん、ホーチミンらは漢字語彙を否定したわけではない。アメリカの独立宣言とフランス革命を参考にした1945年のベトナム民主共和国『独立宣言』に見られる「独立」「自由」「革命」という近代概念は、漢字語彙が使われている。しかし、これらは、親仏ナショナリストが決して使わなかった語彙である。ホーチミンは、「独立」とは何か、「自由」とはどのような状態を指すのか、そしてそれらを達成するための「革命」に至るにはどのような手段をとればいいのかを、自らの体験を踏まえながら、「固有語」で詳しく説明していったのである。豊富な「固有語」はクオックグーに活かされることで、新聞記事や識字クラスの教材となり、より多くの人々の目に触れるという機会を得た。こうしたプロセスも、「固有語」が民族の伝統としての価値を認められる重要な要因であったと考えられる。

以上のように、ホーチミンのクオックグーに対する認識には、大衆性、柔軟性と並んで国際性がみられる。彼は、フランスで様々な下働きを経験しながら階級を意識し、コミンテルン幹部として旧ソ連、中国、タイで活動し、民族の解放を願った。少なくとも、本国と植民地を峻別する宗主国フランスの欺瞞性を見抜く力があった。一方、ファム・クインは、フランス語通訳学校の出身であったが、現地の植民地エリートとして民族の存亡を憂い、生き残る道を模索した。後にクーデターによる日本軍の実効支配が確実になるとみるや、彼は親仏派から一転して親日派になる現実的選択をするが、このことからも植民地エリートの脆弱性がみてとれるのではないだろうか。

注

（1）本論考では、東南アジアの多民族社会を対象とする際の主要なテーマであるエスニシティ（ethnicity）は扱わない。いわゆる多民族が「国民」として自らの一体性を意識する統合のベクトルとは別に、「国民意識」（national identity）に包摂されない少数民族の「我々」意識、すなわちエスニック・アイデンティティを区別する分離のベクトルとの対比で論ずることもできる。エスニシティは、このような民族の意識に焦点を当

あったが、1945年には1,000部以上も発行されるようになった。１号あたり２ページから４ページであったが、春節特集号などは、15ページ前後のボリュームがあり、詩や歌謡など文芸作品も数多く掲載されていた。目標達成のため終刊した『ベトナム独立』に対し、『救国』は、抗仏戦争中も継続して刊行され、結局1954年のディエン・ビエン・フーの勝利までに2,613号を数えた。独立以降の『救国』には、国民の団結を説くだけでなく、中央から村レベルの行政幹部の紀律を正す内容のメッセージなども掲載されるようになった。中央政権の交替にともない、村落レベルでもベトミン寄りの新しい政権が誕生したが、人々の信頼を得られない幹部が続出していると述べられている。例えば、1945年10月17日付けの新聞でホーチミンが挙げた幹部の重大な誤りは、（１）違法行為（２）自信過剰（３）退廃（４）ひいき（５）分裂（６）傲慢であった［史料Tr１：V 369-372］。

『救国』は、クオックグーの識字クラスの教材にも使われることで、実際の発行部数よりも効果的に多くの人々の目に触れることになった。特に、人口の大半が非識字者であったデルタ農村や少数民族の居住区である北部山岳地域において、識字運動が大きな影響力を持ったことから、ベトミンの政策や方針、メッセージはクオックグーの識字教育を通して地方まで普及していったといえる。

４．おわりに

20世紀前半のベトナムのナショナリズムの特徴は、クオックグー・ナショナリズムと換言できるように、クオックグーがナショナリズムの中心軸を形成していた。クオックグーが単なるコミュニケーション手段ではなく、「俗語」から「国語」へと鍛え上げられるべき存在であるという観点は、親仏および反仏のナショナリストの共通認識であった。しかし、フランスの保護か、あるいはフランスからの独立かという政治的立場の違いによって、その内実は大きく異なっていた。すなわち、ファム・クインら仏越提携を唱える「フランス村」の知識人層は、既知の漢字・漢文やフランス語を駆使して、そこからの借用語を多用しても不便を感じなかったと考えられる。結果的に、隠語的で言論界のみにしか通用しない、借用語に大きく依存したクオックグーにとどまった。一方、ホーチミンら共産主義者は、クオックグーを依存すべき語学知識をもたない民

された。それゆえ、本来の新聞記事とは、読者の目を現実から逸らせないよう、明解で正確な文章でなければならないとして、「平民新聞」と題する記事を書いた。その目的を（1）フランス人の残虐行為を打ち負かす（2）ベトナム民族の団結を激励する（3）現在の苦難の原因を分からせ、そこから解放される方法を示すと集約している［史料To 2：P 446-447］。

ホーチミンは1925年に中国・広州で「ベトナム青年革命同志会」（Việt Nam Thanh Niên Cách Mạng Đồng Chí Hội）を結成し、同年直ちに『青年』（Thanh Niên）を創刊した。『青年』は非合法ながら、工場労働者や教員、高校や大学の学生の間で読まれ、またタイや中国の越僑社会にも影響力を及ぼした。1925年には270人だったメンバーの数が1929年には1,700人に急伸した背景には、『青年』の役割が大きかった［Nguyễn Thành 1982：40-42］。創刊当初の『青年』は、所々にイラストが添えられた手書きの新聞で、前半の88号まではホーチミンが直接編集に携わっていた。(11) その後タイプ打ちされるようになり、1930年の廃刊までに（会の解散は1929年8月）、全部で208号を数えた［Sách trên：56-57］。ホーチミンは盛んにロシア革命に言及し、抑圧と搾取のない共産主義社会を目指すべきであると力説し、その論調は、以下のように激しい［Sách trên：61-62］。

> 同胞よ！　自由権は当然の権利なのだ。自由を享受できないならば、死んだほうがましだ。目覚めよ、目覚めよ。我々の身体を閉じこめてきたフランスの鳥篭を打ち破ろう。
> 同胞よ！　いつまで鶏や豚のような扱いに甘んじているのか。鶏や豚ならばずっと拘束されていよう。人間ならばなんとかしてこの束縛から解き放たれる方法を見つけようではないか。

1940年代に入ると、ホーチミンは「ベトナム独立同盟会（以下ベトミン）」（Việt Nam Độc Lập Đông Minh Hội）と呼ばれる大衆組織をつくった。ベトミンは、共産主義者だけでなく、幅広い社会階層を結集する必要性から、「階級闘争」よりも「民族独立」を全面に打ち出し、『ベトナム独立』（Việt Nam Độc Lập）という新聞を発行した。(12) 『ベトナム独立』は独立間近の1945年8月までに126号が発行された。並行してベトミンは組織のオピニオン紙『救国』（Cứu Quốc）を創刊したが（1942年1月）、当初は不定期で、発行部数も100部ほどで

詩歌は私の新しい人生の始まり。
明日死んでも悔いはない。
詩のことばが私の心からゆっくりわき出てくる。
　　*訳注　1946年を指す。
　　**訳注　クオックグーの習い始め。

3－3　反仏ナショナリストの非合法出版活動

植民地解放闘争の思想的バックボーンとなったマルクス・レーニン主義は、主にホーチミンらコミンテルンのベトナム人幹部を通じてベトナムにもたらされた。[10] ホーチミンは、フランス滞在中、植民地同盟を結成し、その機関誌Le Pariaや、フランス左翼系新聞La Vie Ouvrière上で盛んにインドシナ住民の窮状を訴えてきた。ベトナムにおいて反仏的な新聞、雑誌の発行は非合法であったため、ホーチミンは1924年に植民地の言論状況について以下のような論説を書いている［史料To 1：P 403-407］。

> 20世紀半ばにもなって、2,000万人の人口を抱える国で一紙も新聞がないのです！　皆さん、想像できますか。我々の母語（tiếng mẹ đẻ）による新聞が一紙もないのです。（中略）フランス村（làng Tây）に入った人々は、フランス公民権を享受し、新聞を出版できます。フランス語新聞のみですが。（中略）これらの新聞は国家合法的とされています。2つの相反する形容詞が組合わさっている、誠に不可思議なことですので、ちょっと説明が必要です。これらは、フランス都護に依存した新興の現地人資本家の手によるものです。（中略）彼らの分身は半分はコウモリで半分はネズミであって、安南（ベトナム－筆者注）社会に完全に依拠していません。なぜならば、フランス村に入ったのですから。かといってフランス貴族には到底なれっこありません。安南人なのですから。そのため、いつもおろおろしているのです。［傍点部分、原文ではイタリック体］

このように、ホーチミンは仏越提携路線をとるベトナム知識人や買弁的な出版資本家を強く非難した。ホーチミンにとって、合法的な定期刊行物の内容は、広い見識をひけらかし、粉飾が多く不真面目で、まぎらわしい文章として解釈

などの節目に子どもたちや老人、女性に向けて数多くの手紙を書き、新聞に掲載した。これらのアピールや手紙は、当時読み書きができなかった大多数の民衆の心を打ったにちがいない。識字運動の盛り上がりとともに、多くの国民がホーチミンに宛てて手紙を書くなど、両者の間でフィードバックが成立していた。ホーチミンは、政治家という固い印象を与えないために、親族名称を使うことで身近な存在を演出した。例えば、子どもたちに宛てた手紙では、自身を「伯父さん」（bác）と呼び、「君たち（甥や姪）」（cháu）と子どもたちに語りかけている。独立直後の新学期に子どもたちに宛てた手紙では、「伯父さんのことばを聞いておくれ。いつも君たちが勉強がよくできるように周到に心を砕いている１人の人間のことばを。」と語りかけ、ベトナムの独立を守るために、直接戦場に行かなくとも身近な小さな仕事に積極的に参加するように呼びかけている［史料Tr　1　：V　358-360］。その他、老人、女性に向けた手紙でも同様にみられる特徴は、漢学の知識がなければ理解できないような漢字語彙の多い堅苦しい文章は排除され、なるべく２語熟語の「固有語」を使うことで読みやすく、理解しやすい単刀直入な内容になっているということである。このようなホーチミンの姿勢は、今日でも子どもから老人まで「ホー伯父さん」と敬愛の念で呼ばれる要因となっている。

ホーチミンのことばは、確かに農村の人々のもとに届いていた。筆者の調査村であるチャンリエット村は、ハノイの北東17キロの距離にある都市近郊村であるが、(9) そこで出会った１人の老婆の詩を紹介したい［岩井　1998：112］。

打ち明け話
46＊年に平民学務で学べたおかげで、
私は幾つかの散文の詩句を捧げたい。
私の気持ちは心の底から喜びに満ち溢れている。
齢はもうすぐ70歳になる。
ラジオでは私の詩が幾度となく流れた。
お金はないけれど、詩歌があるだけで満足。
それが私の夢、願い。
iとt＊＊でも人生を彩る詩歌ができる。
年をとっても楽しいことはある。

ホーチミンにとってクオックグーは単なる文字ではなく、独立を果たしたベトナム民主共和国の国民自身が使える「国語」としての役割を果たすべきものだと意識されていた。そのため、学齢児だけでなく、あらゆる階層、あらゆる年齢層の教育を目指した、いわゆる学校制度を越えた識字運動を提唱したのである。1946年に初めて制定されたベトナム民主共和国の憲法の第18条には、選挙の立候補者はクオックグーの読み書きを知らなければならないと明記されるなど［Vietnam 1995：17］、識字と政治は極めて密接な関係にあった。

3－2　反仏ナショナリズムと識字運動

植民地時代、宗主国フランスでフランス共産党員として活動し、その後コミンテルンの工作員としてロシアや中国、タイなどに滞在した後、ベトナム民主共和国誕生以降は大統領として多くの外国通信社のインタビューにも応じてきたホーチミンは、多彩な言語を操る国際人であった。一方で彼は、国民向けのアピールや記事では、漢語表現をなるべく使わず、より平易で分かりやすいことばを使って、語りかけるような文章をつくるという大衆的な立場をとった。独立以降各地で開かれた識字クラスの教材として、クオックグーのいろはを教える民謡の替え歌などが採用された［広木　1975：325］ことから、クオックグー伝播会で活動した教師の多くが平民学務運動に参加したと考えられる。1945年９月から1946年12月までの間に、平民学務局によれば、95,665人のボランティア教員が養成され、2,520,678人が読み書きを習ったと報告されている［Marr　1981：184］。さらに、抗仏戦争期も「愛国競争」キャンペーンと名付けられた識字運動は継続され、独立から３年後には800万人近くが識字者となったことが報告されている。教材の内容は、（１）疾病予防の衛生習慣（２）迷信に打ち克つ科学的知識（３）加減乗除（４）愛国心を高める歴史・地輿教育（５）公民・道徳教育とされた［史料To 5：V 131-132］。

膨大な著作を残したホーチミンは、相手によって巧みにことばを使い分けていた。時評や論説記事、インドシナ共産党幹部や大衆運動リーダーに向けた手紙、そして子どもから老人まで国民全般に向けた手紙やアピールには、漢字語彙の多少、語調の強弱などに違いが見られる。特にホーチミンの著作の中で注目すべきは、植民地時代から独立以降の抗仏戦争にかけて国民に向けて発した手紙やアピールであろう。彼は独立記念日、春節（旧正月）、中秋節、新学期

教育は、青年たちに自分の辿ってきたルーツを軽蔑するよう教えるのであり、これこそが青年たちを愚かにしたのである。

また、ホーチミンは、初等教育が十分に整備されず、国民が学びの機会を奪われてきたために、大多数のベトナム人が母語の読み書きさえもできない状態に陥れられてきたとして、植民地教育行政を厳しく批判した。すでに独立以前から、革命の拠点となった北部山岳地域を中心に識字運動が行われていたが、ホーチミンは初代大統領として1945年の独立宣言直後に広範な層に向けて識字運動のアピールを送った。『救国』（Cứu Quốc）という新聞に掲載された「失学に対抗しよう」では、95パーセントのベトナム人が「失学」状態にある、すなわちほとんどの国民が読み書きができないと述べ、全国的な識字運動を展開するよう求めた［史料Tr 1 ：V 367-368］。

（ベトナム民主国－筆者注）政府は、この一年間に全てのベトナム人がクオックグーを学ばなければならないことを定め、民衆の学習を促進するために「平民学務（bình dân học vụ）局」を設立しました。
ベトナム国民の皆さん！　独立を守りたいのであれば、人々を強く、国を豊かにしたいのなら、自身の権利と本分を理解し、見識をもたなければなりません。それではじめて国家建設事業に参加できるのです。そのためにはまず、クオックグーの読み書きができなければなりません。
すでに読み書きができる人は、まだできない人に教えてください。平民学務に力を合わせましょう。この６、７、８年でクオックグー伝播運動を皆さんが起こしたように。まだ読み書きできない人は、がんばって勉強しましょう。夫は妻に教え、兄は弟に教え、子どもは両親に教え、主人は使用人に教えましょう。金持ちは私塾クラスを開きましょう。村の有力者、地主、鉱山所有者、工場主は、自身の隣人、小作人、労働者に読み書きを教えるクラスを開きましょう。
特に女性は、より学ばなければなりません。長年疎外されてきたのですから。ようやく男性に追いつき、自身も国の一員であることに誇りをもてるように努力しなければならない時が来たのです。

の幅広い社会階層との共闘を目指すようになる。1940年からフランスに代わり統治者となった日本軍の1945年８月15日の降伏を受けて、ホーチミンらは総決起し、９月２日にベトナム民主共和国の『独立宣言』をハノイで公布した。同宣言は、冒頭に自由と平等を説くアメリカの独立宣言とフランス革命の人権宣言を引用し、フランスの再植民地化の緊迫感が高まる中、ホーチミンは植民地支配の負の遺産を以下のように告発し、全国民の団結を訴えた［史料To3 ：V 555-567］。

> 奴等（フランス植民地主義者－筆者注）は、学校よりも多くの牢獄を建てた。奴等は我が愛国者たちの殺戮に直接手を下した。奴等は我が蜂起で流された血の海の中で沐浴した。奴等は世論を操作し、愚民政策を行った。（中略）80年以上にも渡るフランスの奴隷政策に勇敢に抵抗してきた一つの民族。この数年間ファシスト（日本－筆者訳注）に抵抗し同盟軍側に味方してきた一つの民族。その民族は自由を与えられなければならない！その民族は独立を与えられなければならない！

このように、ホーチミンが批判の矛先を向けたのは、フランス革命の精神とかけ離れた、植民地での非民主的で暴力的なフランスの支配であった。反逆者に対しては力尽くで弾圧し、親仏的な協力者を懐柔するというフランスの「同化政策」に対するホーチミンの認識は、彼が1924年に発表した「愚民政策」(8)というアピールによく表れている［史料To １ ：P 398-402］。

> 中圻（ベトナム中部－筆者注）では、600万の民に対したった118の学校しか建てられなかった。しかも、安南（ここではベトナム全体を指す－筆者注）の青年の学業を促進し、彼らの能力を開発し知識を与えるのではなく、逆に彼らをより愚鈍にしたのが学校であったのだ。侵略者は、自分たちに仕えるのに必要な使い走りや通訳、小役人を養成する目的の他に、無知よりもさらに退廃的で狡賢く、危険な教育を広く植え付けた。なぜならば、このような教育は、子どもたちの精神を荒廃させ、彼らに偽物の「忠誠心」を教え、自分より強い者を崇拝することを教え、自分を弾圧している自分の祖国ではない祖国を愛することを教えただけだからである。そのような

くの知識人が論陣を張った。『南風雑誌』はファム・クインを主幹として1917年にハノイで創刊された総合雑誌で、クオックグーに関する論争の中心的舞台となった。その他、1920年代半ばにサイゴンで発行された日刊紙『中立報』(Trung Lập Báo) は定期的に15,000部を誇る大新聞で、フランス本国の新聞や雑誌の記事の翻訳ものを多く掲載していた。34ページの週刊誌『婦人新聞』(Phụ Nữ Tân Vân、サイゴン) は最盛期で8,500部が出回った女性誌で、近代家政学の知識を掲載するなど、当時少なからぬ社会的影響を与えた。これら20世紀以降に発行された定期刊行物の編集者や記者はフランス近代教育を受けた新しい知識人たちであった。特に、『インドシナ雑誌』の主幹であるグエン・ヴァン・ヴィンと『南風雑誌』の主幹であるファム・クインは、共にフランス語通訳学校の出身であり、フランス統治の「恩恵」に同調しないベトナム知識人に厳しい批判を向けていた［*Ibid.* ：150-151；岩月　1995：12-13］。

どのような立場で書かれたにせよ、クオックグーの出版物はフランス語出版物に比べれて極めて多様な出自の個々人の目に触れ、書きことばとしてのベトナム語を鍛え上げることができたことは確かである。さらに、インドシナ政庁の検閲制度の下での編集作業は、政治的環境によって微妙に変化し、新聞が廃刊に追い込まれてもまた新しいタイトルで別の新聞が創刊されるなど、検閲をかいくぐって言論活動を行う様々な技術やノウハウが蓄積されてもいったのである。

3．ベトナムにおける反仏ナショナリズムと識字運動の展開

3－1　独立宣言と植民地教育への批判

20世紀初頭のベトナムにおいて、反植民地ナショナリズムの立場を最も鮮明にし、広範な政治活動を展開していたのは、ホーチミン率いるインドシナ共産党（Đảng Cộng Sản Đông Dương）であった。インドシナ共産党は、その名の如くフランス領インドシナに包摂されたベトナム、ラオス、カンボジアの独立解放闘争を主導していたが、その戦略は、レーニンが唱えた植民地抑圧に苦しむ人々の「民族自決権」に依拠し、第三インターナショナル（コミンテルン）の支援を受けながら自らを解放するというものであった。しかし、その後ホーチミンらは階級闘争を唱えるコミンテルンの路線とは一線を画し、ベトナム国内

透するのは、ホーチミンによって国民教育の一環として本格的な展開が決定された1945年のベトナムの独立以降のことである。

2－3　クオックグーの普及と合法的出版物の発行

植民地における出版活動についてインドシナ政庁によって作成された文書は、フランス本国における勅令や法規も含めると、100を越える。植民地統治下で発行された出版物は、全て当局の検閲を受けていたために、当局の許可を得た出版物の論調は、当然親仏的で改良主義的であった。ベトナムで最初のクオックグーによる定期刊行物は、インドシナ連邦の直轄領サイゴンで1863年刊行された『Gia Định Báo（嘉定報）』であった。その後保護領となったハノイにも出版事業が拡大し、ベトナム全体で1922年までに刊行された定期刊行物は98で、その内ハノイを含む北部は44（フランス語36、ベトナム語８）、サイゴンを含む南部は39（同29、10）、フエを含む中部は３（同２、１）であった。1929年には、定期刊行物の総数は153に上り、北部72（同58、13）、南部71（同44、27）、中部10（同４、６）という構成になっている［Nguyễn Thành 1984：30-31］。

20世紀前半は、雑誌、新聞の記事や論説の他に、エッセイや詩、小説（翻訳ものも含め）、チェオ、カイルオンと呼ばれるベトナム舞台劇やオペラの脚本など数多くの文芸作品がクオックグーで執筆されるようになった。このような文化活動が活発になった背景には、ハノイ、サイゴンなどの主要都市部におけるクオックグーの普及が急速に進み、その消費市場が拡大したことが大きく影響している。実際に、1920年代以降、初等教育に必要とされたクオックグーの学習手引き書や読本が相次いで出版された。1940年までの約20年間に、少なくとも88ものクオックグー学習手引き書が発行され、のべ364版を重ねた。発行総数で370万冊にものぼる。1944年から１年間のクオックグー伝播会が発行したクオックグー読本は、175,000冊にも上った。それに対し、フランス語の新聞の発行部数は極めて限定的であった。最大でも3500部を越えることはなく、平均1200部の発行部数にとどまっていた［Marr　1981：46、176-177、181］。

ここでは、主に新聞、雑誌など定期刊行物を中心に取り上げてみたい。クオックグーで書かれた代表的なオピニオン誌に『インドシナ雑誌』（Đông Dương Tạp chí）や『南風雑誌』（Nam Phong Tạp chí）があり、文学や文化について多

しかし、クオックグーにどれくらい漢字語彙を借用すればよいかという問題については、ファム・クインは科学・哲学に関することばは漢字語彙で、日常語は「固有」語彙で使い分けるようにすべきであると漠然と考えていたが［同上　：9］、実際には、ファム・クインの文章は「死語」（chữ chết）が多すぎて読みづらく、その漢字語彙の多さは愚かで危険な猿真似を固定化しかねないと厳しい批判に晒されている。新しい語彙を導入する際、漢字やフランス語から自動的に借用するのではなく、最も適切に概念を表すことができるようなるべく「固有語」で熟語をつくるべきであると唱える論者は、むやみに漢字語彙を借用することを戒めた［Marr　1981：158-159］。

このようなクオックグーをめぐる言論界の論争の果実は、1938年にハノイで設立された「クオックグー伝播会」（Hội truyền bá Quốc ngữ）にも受け継がれた。読み書きができないベトナム人にクオックグーを普及するという目的ゆえに、やがて難解な漢字語彙はクオックグーから淘汰されていった。初代会長は、フランス極東学院に在籍していたベトナム人学者で、フランス総督から許可された官制機関であったが、急進的なメンバーが数多く結集し、その中にはヴォー・グエン・ザップ将軍など、多くのインドシナ共産党員らが参加していた。彼らは、クオックグーの新しい教授方法を考案したが、最も効果を上げた方法は、伝統的な詩に乗せて復唱することで覚えるという方法であった［*Ibid.*：182］。

iとt はふたつの鍵がついている
i は短く点がつき、t は長くて交わる
o は丸い玉子のよう
ô は帽子をかぶっている
ơ は口ひげをつけている

このようなクオックグー伝播会の大衆的な識字活動の結果、1944年からの1年間で1,971人のボランティア教員が59,827人の生徒に読み書きを教えたと報告されている［*Ibid.*：181］。この時期のクオックグー識字者はかなり増加していると考えられるが、その範囲は地方では、まだ省（province）の中心部にとどまっていたようである。後で見るように、実際に村落レベルまで識字運動が浸

あり、その官僚機構も、中国の王朝モデルを模倣した科挙試験によって支えられていた。そのため、植民地以前のベトナム人知識人は、「文明」言語である漢字の習得こそが最高の儒教的教養を身につける最善の方法と考え、「固有」語彙は高度な抽象概念を表すには適さないとして限定的な評価しか与えなかった［岩月　1995：7-10］。ノム（nôm、喃）という用語で把握されていた「俗語」には、例えば日本のように漢字を簡略化したかな文字が考案されることはなかった。ベトナムの知識人たちはあくまで漢字の字体を崩すことなく、むしろいくつかの漢字を合成した複雑なチュノム（字喃、chữ nôm）を考案した。これらは、漢字の意味を知らなければ、その難解な文字を読むことはできなかった。(6)

このような二重言語状況は、フランスの植民地支配下で大きく変化した。植民地政庁は、儒教的知識人は反仏的であるとして、彼らの漢字・漢文教育の機会を大きく制限した。政庁にとって、漢字教育は反仏ナショナリズムに結びつきやすい危険なものであった。一方、植民地政庁はクオックグーをも、より高度な近代的思惟を表す言語として評価していなかった。その姿勢は、上述した『学政総規』にみられるように、中等教育以上の使用言語をフランス語に限定したことに具体的に表れている。仏越初級学校まで出れば十分な一般民衆にはクオックグーの習得を、官吏への登用が可能な中級学校出身者以上のエリートにはフランス語の習得を徹底させるという、準同化政策が、政庁の現実的な選択であった。

このような状況の中で、20世紀初頭からフランスの「保護」を受けながらベトナムのナショナル・アイデンティティを護持しようと考える親仏的な知識人層が登場してきた。彼らは、主に漢字語彙のクオックグーへの盛んな読み換え（借用）をすることによって、クオックグーを国語として自立させることを試みるなど、クオックグーをポジティブに評価しようという立場をとった。クオックグーの漢字語彙借用に熱心な知識人の代表は、北部出身のファム・クイン（Phạm Quỳnh）であった。漢文擁護派であった従来の儒教知識人がクオックグーを「通俗でダラダラしたしまりのないことば」と見下したのに対し、彼は漢字の字体にこだわらず、ベトナム語の中に漢字語彙が溶け込むことによって、クオックグーがナショナル・アイデンティティを体現できると主張した［同上 1995：12］。さらに、ファム・クインはアルファベットの利便性、すなわち「言ったことがそのまま書ける」学びやすさを強調した。(7)

「仏越中級学校」(trường bậc trung học Pháp Việt) は初級学校卒業証書をもつ者が受験資格を与えられた。4年制の中級学校は、フランス語の読み書きが中心で、クオックグーの学習時間は極めて制限されていた。そこでは、クオックグーは理解を助けるための補助的な役割しか与えられなかった。

地方レベルまで学校教育システムを普及する目的で設立が目指された仏越初級学校は、都市部中心の中級学校とは異なり、父兄が望めば、いわゆる学校教育の枠内で漢字教育が許可された。タイドー (thầy đồ) と呼ばれる儒学教師による伝統的な漢字・漢文教育が制度的に保障される一方で、彼らが従来通り自由に私塾の形でクラスを開くことは大きく制約されることになった。当局から許可された仏越初級学校の漢字クラスでは、タイドーを1人で教室に残さず、必ず校長など学校の管理職が教師の見張り役につけられた [Sách trên ：291-292]。

このことから、植民地政庁は、自らの支配体制を強化するために、近代学校教育システムに基づいてフランス語を話す若い近代エリートの養成に力を注ぐ一方で、漢字・漢文教育に制約を設け、反仏的になりやすい儒教的知識人の威信を低下させようとしていたことがわかる。ただ、学校教育システムがベトナム全土において均一に普及されたとは言いがたい。なぜならば、仏越初級学校の設立に関する全費用、例えば学校建設費、机や椅子などの備品経費、そして教員の給与などは全て、申請を許可された当該村落が負担しなければならないことになっていたのである。少なくとも、植民地政庁の教育政策は、学校が比較的多いために近代教育を受けたエリートを輩出しやすい都市部と、大多数の読み書きもままならない農民が居住する地方の農村の文化的格差を広げただけでなく、学校教育を通して近代的学問を受けた青少年と、伝統的教育を受けた、または教育の機会のなかった成人の世代間ギャップをも引き起こした。

2－2　植民地前後の言語状況とクオックグーの位置づけ

ベトナムにおいて使用されてきた言語の歴史的変遷からみると、文字を持たなかったベトナム族のベトナム語 (tiếng Việt)[5] は「話しことば」として日常生活に関わる身近な事柄を表すことはできたが、コミュニケーションの範囲は村落や市場など極めて身近なコミュニティに限定されていた。一方、ベトナム歴代王朝で記述される公文書の言語、すなわち「書きことば」(chữ) は漢字で

2．植民地期のベトナムにおける近代学校教育とクオックグー

2－1　植民地教育と言語政策

仏領インドシナ連邦の成立に先立って、1864年以降直轄地となったコーチシナ（ベトナム南部）では、近代学校教育が導入された。1864年7月には、まずサイゴン（現ホーチミン市）でフランス語通訳養成学校（Collège des Interprèses）が設立され、1879年3月にサイゴンに「南圻学政所」（Sở học chánh Nam Kỳ）と呼ばれる公教育局が設立され、最初の「土着民」（bản xứ）に対する仏越教育プログラムが開始された。このプログラムは、伝達言語としてフランス語を採用し、2つの教育課程で構成されていた。一つは、3年制の初等学校で、10歳から14歳の生徒を受け入れ、フランス文学、算数、計量システム、漢文、クオックグーなどの科目を教えた。もう一つは、3年制の中等学校で、12歳から17歳の生徒を受け入れ、フランス文学、数学、フランスとその植民地を示す地理、幾何学などの科目を教えた［Nguyễn Q. Thắng 1993：265-270］。

1887年に仏領インドシナ連邦が成立し、統治範囲が拡大すると、インドシナ政庁は、近代学校教育政策を連邦内の全地域に導入した。その本格的な施策は、1917年の『インドシナ学政総規（Học Chánh Tổng Quy）』（Règlement général de l'Instruction Publique en Indochine）である。この法規は、ハノイ、フエ、サイゴンなどの主要都市に設立された既存のフランス式中級学校や官吏学校などを新システムの下に再編するだけでなく、(4) 地方の初等教育の普及を目的としたもので、両者を合わせて「仏越学校」（trường Pháp Việt）と名付けられた［Sách trên：289-294］。

法規によれば、全ての社（行政村）に一つづつ「仏越初級学校」（trường công bậc tiểu học Pháp Việt）を設けることが明記された。「仏越初級学校」は、7歳児対象の「幼児クラス」、8歳児対象の「予備クラス」そして9歳児対象の「初等クラス」、10歳児対象の「中等クラス」、11歳児対象の「高等クラス」の5クラスで構成された。9歳児以上のいわば本科生徒は、歴史や倫理科目を履修しなければならなかったが、例えば歴史科目では、フランス植民地のベトナム平定から統治までの歴史、フランスの植民地地図、「土着民」のフランスへの忠誠心などが教えられた。

ベネディクト・アンダーソンは「想像の共同体」(imagined community) として理解した。[2]

本論考の目的は、同様に植民地支配を受けた東南アジアの一国、ベトナムにおけるナショナリズムの高揚および独立へ向けた運動の中でベトナム語がどのように認識され、また独立に向けてどのような役割を果たしたのかを、歴史的に考察することである。インドネシアと異なり、約80年のフランスの支配下にあった仏領インドシナから独立したベトナムは、ラオスやカンボジアの領域を包摂した「インドシナ共和国」を形成しなかった。いわゆる「インドシナ人」意識が十分育たないまま、それぞれが独立を目指すことになったわけだが、その背景には、文化的要因、特にベトナムは中国から漢字語彙を借用するのに対し、ラオスやカンボジアはタイと同様パーリ語を借用して近代的概念を表すといった言語的断絶があったために、インドシナ人としての一体性を表すシンボルを生み出すことができなかったことが大きい［古田　1991：91-92］。また、植民地的な行政と教育の「巡礼圏」を宗主国から引き継ぐ形で独立するのではなく、革命によって独立を勝ち取るという戦略をとった反仏ベトナム人ナショナリストの独立構想は、植民地的な「巡礼圏」観から自由であった［同上書：229-233］。すなわち、ホーチミンをはじめ、ベトナム人共産主義者が目指す「民族独立」は、あくまでベトナムの独立であり、インドシナ域内の全ての「抑圧人民」の独立解放を目指した反植民地闘争は一つの共同戦略として位置づけられていたにすぎない。ベトナム「民族」(dân tộc) と「国家」(nhà nước) は、失われた祖国の回復のイメージの中で一致していた。

本論考において中心的に論じられるのは、20世紀初頭から半ばにかけてのフランス植民地支配下で盛り上がった、親仏ベトナム人知識人および反仏ベトナム人共産主義者のナショナリズムと「国語」問題である。植民地体制という所与の環境の中でナショナル・アイデンティティをいかに発揮するかという課題に対しては、親仏および反仏ベトナム人は共に「俗語」ベトナム語の発展という認識を共有していた。なぜならば、フランス語話者の現地官僚の養成にしかほとんど興味を示さないフランス植民地の近代教育行政にのみ頼っていたのでは、ナショナル・アイデンティティの喪失の危機を免れないと認識されたからである。ベトナム語のローマ字表記であるクオックグー (quốc ngữ)[3] の発展は、民族独立を達成するために不可欠の課題であった。

ベトナムにおけるナショナリズムと「国語」問題
——20世紀前半のクオックグーの扱いをめぐって——

岩井　美佐紀

1．はじめに

ヨーロッパ諸国の植民地支配からの独立を目指した東南アジアのナショナリズムは、そのナショナリズムの領域的広がりと、それに先立つ植民地の行政単位とが一致しているという点で、南北アメリカのクレオール・ナショナリズムと共通している。一方で、そのナショナリズムの中核となったものは、19世紀以降ヨーロッパを席巻した「民族言語的ナショナリズム」(ethno-linguisitc nationalism) と呼ばれるものであり、ナショナル・アイデンティティが民族語に大きく規定されていたという特徴ももっている。これは、言語がそのナショナル・アイデンティティの中核とはならなかったラテンアメリカ諸国におけるナショナリズムとは大きく異なる。そして、植民地におけるナショナリズムのもう一つの特徴は、近代的学校教育を受けた若い現地エリートによってナショナリズム運動が推進されていったということである［アンダーソン　1987：194-199］。このように、20世紀の植民地ナショナリズムの特徴は、それまでのナショナリズムの複合的な性格をもつゆえに、その表れ方も極めて多様であったといえよう。(1)

東南アジアにおける植民地ナショナリズムの最も典型的な例は、広大なオランダ領東インドから「国民国家」へと変貌を遂げたインドネシア共和国であろう。島嶼国家であり、極めて多くの民族集団が存在しているにもかかわらず、どの民族集団の母語をも国語とせず、島嶼間で使用されてきたリンガフランカを基礎としたインドネシア語を生みだしたインドネシアのような国民国家を、